

だれ 誰かが行燈に油を注し、火を付け直す。座敷が少し明るさを取り戻した。

その夜の寄り合いは結論がでないまま散会した。

彦輔の心配をよそに、新田村の長老たちは必ず提案に応じると、たえの自信は揺るがない。

帰り道、彦輔は歩きながら新田村を救う方法はないかを考えた。たえのいう日照り病が村の宿命などと、到底受け入れられるわけがない。かといつて一年間収穫なしというのも自殺行為である。

家に帰り床に入ってからもう考え続けた。そして、この時代では有り得ないある決意をする。もう、菜の花畑でいじめに屈した少年の姿はここにはなかった。

菊造は池の拡張などより、まず今日の水を確保しなければならなかった。あの騒動が、いつ起こってもしないで済むなら、年中の伊平に頭を下げるのだった。

「新田村じゃ水不足で村が死にかけておるんじや、なんとか神五郎池の水を分けてはくれんか」

「あんたも見ただじやろう、池の水を、もう底が見えかけとる。分けてやろうにも無いもんは分けられん」

残り少ない池の水を二つの村で使えないかと菊造の心からの説得が続く。二人の議論が平行線をたどるのを見かねて、たえの口が開いた。

「世話役殿、日照り病は三年続いていると聞いた。

このままでは毎年百姓が苦しむ。私はため池を

数日後、たえと菊造は上流の高木村に向かった。

菊造は神五郎池を拡張したいと申し出て下流

村の言い分など訊き入れられる可能性はないといったが、たえが高木村を説得する自信があるというので、その言葉を信じて行くことにしたのである。

若さと熱意を持った者の足取りは、村の苦悩を背負う老人とは比べ物にならないほど早かった。

二人は昼過ぎに高木村に着き、菊造が幼なじみの兼松伊平を訪ねた。伊平は神五郎池の世話役をしていたからだ。

兼松伊平は、初老の庄屋である。白髪まじりのちよんまげと上等の羽織は風格を感じさせる。

「造る職人だ。神五郎池を拡張して、上流も下流も潤う田畑とされてはどうか」

伊平は池がどれほどの犠牲の上に造られているかを知っていた。伊平の父親は神五郎池の堤を補修する工事の際に土砂の下敷きになって亡くなったという。

伊平との協議は結論を見いだせないまま平行線をたどるだけ。二人は「何度でもやってくる」といい残すのが限界だった。

一方、彦輔も何か案があると家を出て行ったが、それが実現しないのか家に帰ると自分の部屋に引きこもってしまった。

たえがやって来てから二十日が過ぎた。太陽は日増

しに強くなり、蟬の鳴く声に耳につく季節になって
いた。もういつから雨が降っていないのか思い出すこ
ともできない。川が枯れ、田には根の深い雑草が茂
りつつあった。

深刻な水不足に連日開かれる寄り合いだが、そこ
に足を運ぶたえは、自分の知識を惜しみなく披露した。
高木村では池を広げ、出口を増やせば大雨洪水を避
けることができるかと訴え、新田村では、もう日照り
病に苦しむことが無くなると説得した。

高木村の長老たちは、たえの努力もあって少し
ずつ軟化し、新田村も少なからず理解し始めている。
たえの熱意と行動力が実を結びつつあった。

そんな中、数日間、顔を見せなかった彦輔が息を
よられたか、頼恭に目通りを願っていた。それが叶うと日照り
病に侵され民が苦しむ惨状を訴えたのだ。
その行動は命をかけた賭けだった。江戸時代、
藩主である殿さまに直談判などあり得ない話で、

事も次第によっては流罪になってもおかしくない。
もはや、争いごとを嫌って、学問だけが生きがい
の彦輔ではなかった。たえの自信に満ちた行動力
が大きな勇気を与えたのだ。

でも、いくら若者が勢いに任せて正しいと思う
訴えをしたところで、時の権力者が百姓の声を
訊くことはない。

それを救ったのは後藤芝山の助言だった。
「殿、水の富めぬ国が知恵と民の力で石高を安定

切らして菊造の屋敷に駆け込んできた。久しぶりに
見る彦輔は、日焼けした額に玉の汗をかいて、息が
はずんでいる。何か大変なことが起こったという顔
だ。

菊造は彦輔の只ならぬ表情に、あわてて彦輔
を抱きかかえた。

「何があつたんじゃ」

「菊造さま、殿さまが新田村と高木村の年貢を
免除してくれることになりました。これで神五郎池
の工事ができます」

「何と」

菊造は絶句した。

彦輔は、後藤芝山にお願いして、藩主である松平

させれば、江戸の上さまにも信任厚く、殿の栄華も
益々のものとなりましょう」
その一言で松平頼恭の心は動くのである。
「芝山のいうとおりである。たとえ今年、年貢が取れ
たとしても、来年、再来年の保証が無いのであれば
藩の存続が危ぶまれよう。今年はその村々の年貢を
免除するゆえ、ため池の工事を優先せよ」

命をかけた賭に勝った。藩主からそのような言葉
を導きだし、ため池造りの課題を一つ解決するこ
とができた。

これで、人足を出しても今年の冬は越せる。後は
高木村の説得だけになった。

一方、たえは両方の村を説得する傍ら工事の

詳細な絵図面を書きあげようとしていた。高木村に足を踏み入れた時につくった絵図面は基本的なもの、工事期間を少しでも短くするためにも、細かい計画が必要である。

兼松伊平にも協力を求めた。神五郎池の世話役ならば流れ出る水路を全て知っているはずだ。水路さえわかれば流れる方向が土地の高低を証明してくれる。長老たちの推薦もあつて、快く了承した伊平は、たえに同行し水路の位置を指示した。

茂みの中に分け入り水路を探すが、あることに気づく。

「伊平殿、あれは」

「ああ、あれはお久米さんの家じや。夫の辰三は

少ない水源をこの谷合いに溜めるしかないのだ。

たえは、お久米さんの家の位置を書き込んだ絵図面を大事そうに丸めると小脇にかかえて持ち帰るしかなかった。

日が暮れているにもかかわらず、年貢免除の噂を聞いた新田村の百姓たちは救世主である彦輔の家に集まつてきた。後藤芝山も彦輔の働きを父に伝えるためにやつてきていた。

父と母が腰を抜かすほど集まつた人々、それは家に入れぬほど増えていた。

そこで芝山は、正式に藩主からの御布令を読み上げた。松平頼恭の領民に対する深い慈愛が感じられる御布令書で、若い百姓の喜びようは天を

十年前に病で亡くなつての、一人息子と暮らしとる

深い茂みに隠れるように建っている。最初に絵図面を作成した時には見つけられなかった家だ。

恐れていた現実があつた。ため池を拡張することによつて、お久米さんの家と田畑が完全に水の下に沈むことは確実だ。

たえの確認不足だつた。池に沈む家があるとわかつていたなら、最初から池の拡張など考えない。それは、高屋の権左が日々伝えていた土地は百姓の命、百姓を泣かしてはならぬという教えだつた。かといつて、ほかに池を造る場所はない。ただでさえ平坦な讃岐平野、山からの湧水は期待できない。

も突きぬける勢いである。それは水の心配がなくなるといふ喜びもさることながら、殿さまが真剣に

百姓のことを考えてくれたといふ喜びだつた。誰かが酒を持ち込み、彦輔の家族も巻き込んで

宴会になつた。庭も表もたいまつが焚かれ人であふれている。浮かれている彦輔は、たいまつの下で座り込む人影に気づいた。薄暗い中で長い髪を束ねた姿は、

たえに間違いない。人をかき分けてたえに近づく。「たえさん、どうしたのですか」

たえは蚊の鳴くような声でつぶやいた。

「池は、できぬ」

只ならぬ、たえの言葉に困惑する。あの強気で自信家の言葉とは思えない。

たえは、今にも泣きそうな顔で一軒の家が池の下に沈んでしまうことを告げた。これは父の権左が一番やってはならないことと日々言い聞かされていたことだと説明する。

しかし、ここまできてやっぱり、池はできませんでは通用しない。

他に方法はないのかと訊くが、たえは「無い」と短く答えるだけ。たいまつのが小さくなり座り込むたえの影も消えていく。

「この地に来て一ヶ月、水を溜める位置を探して歩いた。最初に決めた場所以外には、池ができて水は溜まらぬ。すまない、私が愚かだった」

その家を避けてできないのかと何度も尋ねるが、

答えは同じ。ここにいる、ため池職人は、すでに誇りの欠片すら失ないかけているようである。

その問答を影から聞いていた後藤芝山が、ゆつくりと二人に歩み寄ってきた。一度、彦輔を見て微笑むと、すぐにたえの視線に会わせるようにしやがみ込んだ。

「たえさんといわれたか、悪いが今の話を聞かせてもらったよ。少しだけ私の話を訊いてもらえるかな」

小さく頷きたえは、芝山の方に身体を向けて座りなおした。

(以上5月6日放送分)